

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：秋山 正子

研究分野	研究内容のキーワード
在宅看護，訪問看護，ターミナルケア	在宅看護，訪問看護，ターミナルケア，がん看護，アロマセラピー
学位	最終学歴
修士（保健学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 『住み慣れた家庭で最期まで～在宅看護を学ぶ』講師	2016年2月18日	日本セカンドライフ協会(JASS)において、『在宅看護』をテーマに120分の講演を行なった。
2. 『ケアスタッフのためのアロマセラピー』講師	2013年12月20日、2014年11月14日	西宮市社会福祉事業団内の職員研修として、90分の講義・実習を主催した。全職員の希望者を対象に、1年目はアロマスプレー作り、2年目はハンドマッサージの実習を行った。
3. 『女性のからだセミナー』講師	2008年6月13日	大阪ガス泉北ディリバにおいて、90分の講義と実習を行った。
4. セラピストのためのカラーセラピー練習会主催	2007年4月から2007年12月	セラピストのためのカラーセラピー練習会を計6回主催した。
5. NPO法人におけるアロマセラピー研究の講習実施	2007年2月から2010年4月	NPO法人においてアロマセラピー研究を促進するための研究部を組織した。研究動機の重要性やアロマセラピーにおける研究について講義を行なった。
6. 在宅患者を支援するクリニック職員へのカラーセラピー勉強会主催	2007年11月7日	クリニック職員を対象にカラーセラピーの勉強会を主催した。色彩が心身に与える影響について講義し、在宅生活を送る外来患者様の生活やクリニック内の色彩環境について意見交換を行った。
7. 研修・事例検討会・勉強会実施	2001年4月から2015年3月	病棟及び訪問看護センターにおいて、研修委員・事例検討委員・感染リンクナース・リスクマネジメント委員として、毎月の研修・事例検討会を実施した。また、必要時に感染管理やリスクマネジメント、ポジショニング等の勉強会を主催した。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 看護学生・医学生の訪問看護臨地実習指導	2011年6月1日から2015年3月31日	5か所の訪問看護センターにおいて、4か所の大学及び2か所の専門学校の臨地実習指導に関わった。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 日本アロマセラピー学会認定看護師	2010年3月21日	267時間のカリキュラムを修了し、メディカル・ナースアロマセラピスト (MNA) の資格を取得し、述べ約200名の全身アロマトリートメントを実施した。 110時間のカリキュラムを修了し、英国ASIACT認定カラーケアプラクティショナー資格を取得し、述べ約600名のカラーセラピーを実施した。
2. AHCP (現HCJ) 認定メディカル・ナースアロマセラピスト	2009年9月30日	
3. 英国ASIACT認定 カラーケアプラクティショナー	2006年2月26日	
4. 保健師	1998年5月15日	
5. 看護師	1998年5月15日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪府看護協会訪問看護研修ステップ1修了	2010年11月から2012年2月	209時間のカリキュラムを修了した。 外照射を受ける患者がもつ放射線治療に対する認識の変化～放射線・放射線治療に関するオリエンテーション用紙導入前後の比較
2. 大阪大学医学部附属病院キャリア開発センター 緩和ケアコースⅠ・Ⅱ、感染管理コースⅠ修了	2005年10月	
3. ホスピスケア研究会「がんを知って歩む会」ファシリテーター研修修了	2004年8月	
4. 第9回 大阪癌とQOLセミナー 一般演題発表	2004年7月31日	
5. 訪問看護師		
6. 大阪大学医学部附属病院 病棟看護師		
7. 林クリニック 外来看護師		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
8. 村田泰正クリニック 外来看護師・アロマセラピ		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 終末期がん患者に対する看護師の感情・行動傾向～死のアウェアネス理論による分析	単	2001年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文	グラウンデッドセオリーの先駆的研究である「死のアウェアネス理論」を、わが国において質問紙調査により量的に検証した。看護師はまず感情レベルで患者に対応していることや、残された時間を有意義に過ごせるように配慮する行動傾向等が示唆された。
2. 看護婦（士）と看護学生の死生観に関する質問紙調査～死のイメージ・考え・態度による分析	単	1999年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻学士論文	死は漠然としたマイナスイメージととらえられ、考え・態度の因子分析では、死生観は、「関心・意味づけ」「宗教的・霊的考え」「恐怖・不安」「行動的態度」などの5因子から構成されていた。看護学生は、看護婦（士）と比し、死をより「疎遠な」「わからない」ととらえ、生に対してはより楽観的と考えられた。
3 学術論文				

その他				
1. 学会ゲストスピーカー				

2. 学会発表				
1. Association of Visiting Nurses' Response with Cancer Patients' Good Death by Awareness of Dying Type.	共	2019年7月25日	The 21st IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics (San Francisco)	Akiyama M, Kabayama M, Kuyama K, Kamide K. : The aim of this study was to determine the association of VNR with GD in 4 types of AOD for end-stage home cancer patients. We sent self-administered questionnaire to visiting nurses in order to assess their response with end-stage cancer patients and statistically analyzed with one-way ANOVA. Participants' average age (N=386) was 46.8years. The proportions of AOD type were OA (67.1%), CA (10.6%), SA (8.8%), and MPA (7.3%). The GD score of OA was higher than SA (p=.01) and the CA was higher than the SA (p=.01). In dealing with information related to patient's death, the VNR score was higher for OA than for SA (p=.01). The higher VNR score was significantly associated with the higher GD scores.
2. 終末期がん療養者に対する訪問看護師の対応とGood Death 一死のアウェアネス理論における終末認識による分析	共	2017年9月16日~17日	日本エンドオブライフケア学会 第1回学術集会	秋山正子、樺山舞、久米弥寿子、神出計、小笠原知枝【目的】①終末認識の4タイプの割合、②終末期がん療養者に対する訪問看護師の対応(以下対応)、③終末認識と対応、Good Deathの関連を明らかにすること。【方法】対象者の属性、終末認識、対応尺度、看取りケア尺度、Good Deathからなる自記式質問紙を用い、郵送にて配布・回収を行った。SPSSにより因子分析、一元配置分散分析、多重ロジスティック回帰分析を行った。【結果・考察】対象者は387名、平均46.8歳であった。4タイプの割合は、オープン67%、閉鎖11%、疑念9%、相互虚偽7%であった。対応として【感情】【希望支援】【情報】の3因子が抽出された。疑念よりもオープン・閉鎖において、訪問看護師は終末期がん療養者の死をGood Deathと捉えていた。訪問看護師の感情がより肯定的であるほど、死へのケアがより望ましいものであるほど、訪問看護師は終末期がん療養者の死をGood Deathと捉えていた。
3. Seasonal Changes in Blood Pressure and Serum Electrolytes for Older Patients with Home Medical Care.	共	2017年7月25日	The 21st IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics (San Francisco)	Koujiya E, Kabayama M, Sakanoue K, Huang Y, Akiyama M, Yamamoto M, Rakugi H, Kamide K. : We investigated seasonal variations of BP and serum electrolytes in order to obtain suggestions about future effective treatments or nursing care in old patients with home medical care. Study subjects were 78 patients age 65 years or older receiving home medical care participating in Osaka home medical care registry (OHCARE), a prospective cohort study. The mean age of the subjects was 84.4 and male was 37%. Mean SBP and DBP

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
4. 訪問診療を受療している在宅患者における認知症合併する高齢者高血圧の現状	共	2017年6月14日～16日	第59回日本老年医学学会 学術集会 (名古屋)	was higher in winter than in summer (122.4 ± 17/65.4 ± 10 vs. 124.5 ± 20/68.4 ± 10mmHg) and there was statistically significant difference in DBP (p=0.007). Especially, high SBP group (SBP ≥ 130mmHg) had greater changes both in SBP and DBP than low SBP group (SBP < 130mmHg). 黄雅, 樺山舞, 坂上和子, 糀屋絵理子, 秋山正子, 山本真理子, 井上貴子, 樂木宏実, 神出計: 在宅高齢高血圧患者の降圧治療実態及び認知症を併存する場合の血圧コントロール状態を検討した。複数の在宅療養支援診療所で受療している179名を対象としカルテ等から情報を収集した。認知症有無別の高血圧患者の降圧治療実態と血圧値を検討した。分析対象者179名、平均84歳、高血圧116名、認知症合併は87名であった。降圧治療において単剤使用(43%)のうちCa拮抗薬の使用頻度が最も多くARBとループ利尿剤も多かった。前期高齢者と比較し後期高齢者のDBPが有意に低かった。要介護が重度であるほどSBP・DBP共に有意に低かった。認知症合併群のSBP・DBP共に認知症なし群より約3mmHg低かった(125/68vs. 128/71)。認知症合併群において認知症が重度であるほどSBPが有意に低かった。85歳以上の超高齢者においてもSBPが10mmHg低く(p=0.024)、DBPも低い傾向があった。
5. 訪問診療を受療している在宅療養高齢者における血圧、電解質の季節変動とその要因に関する検討—OHCARE研究—	共	2017年6月14日～16日	第59回日本老年医学学会 学術集会 (名古屋)	糀屋絵理子, 樺山舞, 坂上和子, 黄雅, 井上貴子, 秋山正子, 山本真理子, 樂木宏実, 神出計: 在宅療養高齢者において、季節変動に伴う血圧・電解質の変化の実態を調査し、その傾向を把握することを目的とした。複数の在宅訪問診療を受けている65歳以上の患者のうち、初回と6か月後調査で、夏季、冬季に調査を行った78名(平均84歳)を対象とした。診療記録より情報収集し、血圧、電解質の変化を解析した。対象の約60%は要介護3以上であった。血圧平均値は、夏季122/65、冬季125/68と冬季の方が高く、dBPにおいては統計的に有意であった(P=0.007)。冬季sBP130をカットオフとし層別すると、血圧高値群でsBP、dBP共に有意差がみられた。Naは夏季、Kは冬季が有意に高値であった。電解質において季節変動を認めた群は、変動がなかった群と比較して「ベースのK値が高い」「腎機能が悪い」「高齢」が関連要因と考えられた。患者個々に最適なケアを検討する必要がある。
6. 訪問診療を受療している在宅療養高齢者における要介護度悪化に関連する要因—OHCARE研究—	共	2017年6月14日～16日	第59回日本老年医学学会 学術集会 (名古屋)	山本真理子, 樺山舞, 坂上和子, 糀屋絵理子, 黄雅, 井上貴子, 秋山正子, 樂木宏実, 神出計: 訪問診療受療中の高齢者の要介護度悪化に関連する要因を検討することを目的とし、在宅療養高齢者147人(男性54人、平均84.3±8.3歳)を対象とした。カルテや医療従事者への聞き取りから情報収集した。初回調査から約1～1.5年後に追跡調査を実施し、要介護度維持群と悪化群に分け多変量ロジスティック回帰分析を行った。初回は要支援1～要介護3の軽中度群が46.3%、要介護4以上の重度群が36.1%であり、骨関節疾患罹患は37.1%であった。追跡時における維持群は44.9%、悪化群は32.0%であり、要介護度悪化には、骨関節疾患罹患(OR 4.5)が独立した有意な関連を示した一方で、筋力低下が2肢以下であること、糖尿病・脂質異常症に罹患していないことも、有意な関連が認められた。在宅療養高齢者の要介護度悪化の要因として、骨関節疾患罹患が最も強く関連していた。
7. Awareness of Dying of End-stage Cancer Patients in Home and Visiting Nurses' Cognitive Correspondence.	共	2017年3月9日	20th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Schools) (Hongkong)	Akiyama M, Kamide K, Kuyama K, Kabayama M, Nitta N. : We aimed to determine the types of awareness of dying and the factors of visiting nurses' cognitive correspondence in Japanese home cancer care. We sent self-administered questionnaire to 659 visiting nurses. Data was statistically analysed using descriptive statistics and factor analysis with SPSS 23.0. We received 399 (60.5%) replies and analysed 386 (96.7%) valid responses. We verified that the scale we used was reliable and valid. We performed factor analysis and identified three components that we termed as "emotional attitudes", "care to fulfil wishes" and "explanation about death or illness". The α coefficient had a range of 0.76-0.86.
8. 在宅医療を受ける高齢者の季節変動に伴う血圧・腎機能変化に関する検討—OHCARE研究	共	2017年3月17日～19日	第81回日本循環器学会 学術集会 (金沢)	糀屋絵理子, 樺山舞, 坂上和子, 黄雅, 井上貴子, 秋山正子, 山本真理子, 樂木宏実, 神出計: 在宅医療を受ける高齢者において季節変動に伴う血圧・腎機能の変化の実態を調査し、その傾向を把握するこ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
9. 在宅医療を受療している認知症患者の生活習慣病管理に着目した認知機能悪化要因の検討：OHCARE研究	共	2017年10月7日	第28回日本老年医学会近畿地方会	とを目的とした。在宅訪問診療を受けている65歳以上の患者のうち、初回と6か月後調査で夏季、冬季に調査を行った78名(平均84歳)を対象とした。診療記録より情報を収集し、季節変動と血圧、腎機能、電解質の変化を解析した。sBP、dBPの平均値は夏季122.4±17.4/65.4±10.1、冬季124.5±20.1/68.4±10.0と冬季が高く、dBPにおいては統計的に有意であった(P=0.007)。冬季sBP140をカットオフとすると、血圧高値群でsBP、dBP共に有意差が認められた。採血データではCreで夏季の方が有意に高かった。電解質はNaで夏季の方が高く、Kは冬季の方が高かった。これらの変動を把握した上で、医師や訪問看護師は、患者個々に最適な治療、ケアを検討する必要がある。 黄雅、樺山舞、坂上和子、糀屋絵理子、秋山正子、山本真理子、樋上容子、樂木宏実、神出計【目的】在宅医療を受療している認知症患者において認知機能の維持・悪化に関連する要因を明らかにすること。【方法】複数の在宅療養支援診療所で在宅医療を受けている認知症高齢者を対象とした。情報は主にカルテより収集した。2年間の追跡データから、認知自立度から悪化・維持に分け、関連要因を多重ロジスティック回帰分析で検討した。【結果】対象者は116名(平均85歳、女性73名)で、認知機能維持群76%、悪化群24%であった。女性において、認知機能維持の要因は、認知症自立度重度(OR0.28)ならびに降圧薬の内服(OR0.27)が独立した関連要因で、男性では有意な要因は出なかった。【結論】在宅医療を受ける認知症高齢患者において認知機能の維持・悪化には生活習慣病の要因が関与すると考えられ、女性において降圧薬内服が認知機能を維持する可能性が示唆された。
10. 在宅療養高齢者における血圧コントロールの実態と療養中イベントとの関連性 - OHCARE研究 -	共	2017年10月20日～22日	第40回日本高血圧学会総会	糀屋絵理子、樺山舞、黄雅、秋山正子、山本真理子、中村俊紀、廣谷 淳、福田俊夫、玉谷 実智夫、奥田好成、生島雅士、馬場義親、長野正広、樂木宏実、神出計：在宅訪問診療受療高齢者において血圧管理・降圧治療の実態を把握するとともに、血圧コントロール群別に療養中イベントとの関連性を検討する。複数の在宅療養支援診療所で訪問診療を受けている65歳以上の患者のうち初回と追跡調査(6か月-12か月後)が可能であった151名(84±8歳)を対象とした。ベースラインsBP、dBPの平均値は123/68。降圧薬内服者は94名(62%)。sBP120以上群(93名39.6%)、sBP120未満群(61名60.4%)の2群において比較を行うと、sBP120未満群において、sBP120以上群より「褥瘡あり」「呼吸器疾患あり」の割合が有意に高かった(p=0.01)。追跡において、sBP120未満群では、sBP120以上群より「療養中の入院イベント」の割合が有意に高かった(p<0.01)。過度な降圧は避けるべきと考えられた。
11. 訪問診療受療中の在宅療養者における転倒に関連する要因の検討—OHCARE研究—	共	2016年10月22日	第27回日本老年医学会近畿地方会(大阪)	坂上 和子, 樺山 舞, 福崎 円香, 奈古 由美子, 井上 貴子, 黄 雅, 秋山 正子, 山本 真理子, 樂木 宏実, 神出 計
12. 在宅医療受療者における認知症合併糖尿病患者のコントロール状態の検討	共	2016年10月22日	第27回日本老年医学会近畿地方会(大阪)	黄 雅, 樺山 舞, 坂上 和子, 井上 貴子, 奈古 由美子, 福崎 円香, 秋山 正子, 山本 真理子, 樂木 宏実, 神出 計
13. 精油が抗細菌・抗真菌作用を示したと考えられる3症例	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会学術総会	
14. 精油使用施術における皮膚障害発生の現状とその頻度についての報告	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会学術総会	
15. スイートオレンジによる気分の改善効果	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会学術総会	
16. 真正ラベンダーにより治療した手指粘液腫の5例	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会学術総会	
17. 終末期がん患者に対する看護師の感情・行動傾向～死のアウェアネス理論による分析	共	2000年12月	第20回日本看護科学学会学術集会	
18. 看護婦(士)と看護学生の死生観に関する質問紙調査～死のイメージ・考え・態度による分析	共	1999年3月	第12回日本看護研究学会 近畿・北陸/中国・四国地方会	
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 放射線治療における看護～当病棟での看護を中心に	単	2004年4月17日	第27回 ターミナル期がん看護における理論と実践のリンケージ研究会（大阪大学医学部保健学科基礎看護学研究室）	放射線治療看護について、放射線治療の概要、副作用別・疾患別のケアについて説明した。
2. 多発性骨転移がある40歳代男性患者のニーズをみたまケアをめざして	共	2004年12月1日	第31回 ターミナル期がん看護における理論と実践のリンケージ研究会（大阪大学医学部保健学科基礎看護学研究室）	他病棟・他病院の看護師や研究者と共に事例検討を行った。
3. 翻訳）がん患者への臨床第Ⅰ相試験：参加者の認識。	共	2000年1月	がん看護	原著；Catherine Hutchison:Phase I trials in cancer patients:participant's perceptions.European Journal of Cancer Care 7:15-22,1998
6. 研究費の取得状況				
1. 在宅看取りの満足度に関連する要因～在宅診療記録・訪問看護記録と質問紙の量的分析	共	2017年～2020年	科学研究費補助金（基盤C）	
2. 在宅療養者と家族のQOLに影響するレジリエンスの解明と在宅療養支援モデルの構築	共	2015年～2018年	科学研究費補助金（基盤C）	
3. 終末期がん療養者に対する訪問看護師の感情・行動傾向	単	2015年～2017年	科学研究費補助金（研究活動スタート支援）	

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年9月10日	吹田市みんなの健康展 補助
2. 2007年2月から2010年4月	緩和ケア病棟におけるアロマセラピー・カラーセラピーボランティア
3. 2007年2月から2011年12月	NPO法人・レンタルスペース・イベント・訪問にてアロマセラピー・カラーセラピーの実践